

*Erindring om kærligheden* 『愛の追憶』から見る  
Kirsten Thorup が描く母親像  
～半世紀にわたるデンマーク社会の変遷とともに～

デンマーク語専攻 澤邊由美

目次

1. はじめに
  - 1.1. 研究目的
  - 1.2. 論文要旨
2. 作家紹介
  - 2.1. 作家略歴
  - 2.2. Kirsten Thorup とリアリズム
  - 2.3. 執筆スタイル
3. 作品紹介
  - 3.1. あらすじ
  - 3.2. 作品批評
  - 3.3. 人物相関図
4. 物語から見るデンマーク社会
  - 4.1. デンマーク社会の変遷
  - 4.2. はみ出し者から見たデンマーク社会
5. 三世代にわたる母親像
  - 5.1. 主人公タラと母親
  - 5.2. 主人公タラと娘シリ
6. まとめ

使用テキスト

参考文献

参考辞書・辞典

インターネット上の資料

要約

本稿は、現在もデンマークにて活躍する女性作家 Kirsten

Thorup の『愛の追憶』 *Erindring om kærligheden* (2016) を読み解くことにより、「母親像」及び「母親と娘との関係」に対するトーロプ自身の最終結論に迫ることを主たる目的としたものである。同時に、リアリズム作品である本作を再考することで、作家が現代デンマーク社会に抱く印象、そして引いてはその実態に焦点を当てた。

第一章では導入として、複数の学術論文を引用しつつ、女性たちが思い悩む原因に、世間一般にはびこるステレオタイプとしての「理想の母親像」があるという昨今の状況を示した上で、本論文の研究目的や要旨を述べた。第二章では、トーロプ自身についてあらゆる角度から説明を行った。彼女の生涯の概略を述べ、執筆スタイルであるリアリズムの歴史を挙げたうえで、インタビュー記事や本文をもとに作品特徴を纏めた。トーロプの小説全体に共通する最大の特徴は、他のリアリズム作品の例にもれず、実際の現実社会を反映していることである。国内外における政治的事象や経済状況、移りゆく人々の志向など様々な社会的要素を取り込み、それを実際に小説設定や背景に描写している。また、登場人物のキャラクター像や彼らが経験する事柄等が、彼女の経験を材料としていることが多い点も、リアリズム作品に多くみられる特徴だと言えよう。一方で、デビュー初期にモダニズム詩を執筆していた彼女独自の特徴に、①回想という体で物語が進むこと、②主観的な一人称視点と客観的な三人称視点を混在させたり、人称代名詞を多く用いたりすることで、キャラクター像を掴みにくくしている、という二点を挙げた。続く第三章にて、小説のあらすじ、北欧理事会文学賞を受賞した所以や現在での評価及び先行研究について触れ、人物相関図を示した。

第四章からは本論へと入り、小説から読み取れる、デンマークにおける社会的問題点を分析した。まず、「親子のかたち」が時代によって変化し得るものであるという仮説をもとに、本作は移ろいゆく家族関係を描くにあたり社会的移り変わりを丁寧に作品内に描写しているからこそ、その文学的価値をより高いものにしてしていると考察し、本章にて社会変化を考察する意義を述べた。続いて、小説の舞台である 1970 年代以降半世紀のデンマークにおける主だった社会変化を小説内で関係する事象に絞り客観的事実として確認し、作品内にてそれ

らが触れられていると示した。本作では、古い思想や体制が残り都市部から取り残された地方の人々、ホームレス、難民、生活保護受給者(主人公タラ)、はたまた社会主義思想者など、社会的に隔絶された「はみ出し者」の登場が非常に多く、彼らの生活が多く描写される。ここから、彼らが強いられている実態に焦点を当て問題提起を行いたい、という作家の意志を強く感じる。「幸せの国」として知られ、「全国民が」生きやすく、生活を保障された福祉国家を目指したにも関わらず、その対象を本当の意味での「全国民」とすることが出来ず、「はみ出し者」を許さない社会へと変貌してしまったデンマークの「穴」を描く場面を列挙した。

第五章にて、セリフや行動描写を引用しながら、①娘タラとその母親 mor、②母親タラと娘シリ、二つの親子におけるキャラクター像や関係性を分析し、論文の要である「母親と娘との関係」について考察を行った。①娘タラとその母親 mor について、簡単にまとめる。mor は母親の不在により母親像を持たないまま母となった。結果、家事をせずホームレスらの援助をするなど、mor は当時人々の共通認識として存在した「理想的な母親」としては振る舞えず(振る舞わず)、タラは母親像を持たないまま成長した。いびつとも言える家庭環境でもなお、彼女らは互いに対する愛情を持ち合わせ、タラは mor の生き方を尊敬し憧れを抱いた。次に、②母親タラと娘シリについてである。母親像をもたないまま母親となったタラは母親になりきれず、幼いシリを置き去りにするなど酷い母親であった。しかしその様な母親に育てられてもなお、シリはきちんと成長し、最終的には愛する人との子を身ごもり自分自身も母親となる。彼女ら親子の関係性も悪くなかった。これら二組の親子をそれぞれ図を用いつつ比較、検討したうえで、mor、タラ、シリ of 三人の関係性を改めて図解した。

最終章となる第六章では、第五章での考察を更に深め、「母親像」及び「母親と娘との関係」に対する作家トーロプの結論について考察し、まとめを述べた。3人のキャラクター像や関係性には大きく2つの共通点が存在する。①2人の母親は「よき母親」ではなく、理想的な母親像とはかけ離れているという点、②行動を伴っていない母親でも、子どもを無条件に愛しているという点、である。トーロプは「普通」とは外れた母親を描くことで、その愛は無条件かつ不変であると

いうことを示した。また、半世紀にわたり現実に起こった事象を注視したことで、社会が如何に変化したかを描き、その一方で、母親に対する理想論や期待される役割は変化してゆかない実態を映し出した。母親に関わらず子がきちんと成長するのであれば、理想の母とはいったいどの様なものか？ その様なものは存在するのか？ 作者は読者にこうしてパラドックスを投げかけることで、理想の母親像とは、それ自体が必要のないものであり、意味をなさないものである、と訴えたのだ。最後に、トーロプ自身が母親であった際に「役割」を全う出来ず、自責の念に駆られているという内容のインタビュー記事を引用し、我々の無意識下にも知らず知らずの固定概念や役割の押し付けが存在していないか、改めて見つめなおすきっかけを提示する小説であると結論づけた。